

文系学部生の大学生生活満足度・ 充実度と職業イメージとの関連

—キャリア支援のための予備的検討—

國 眼 眞理子・松 下 美知子・苗 田 敏 美

Relation between the Occupation Image and the Grade of Satisfaction and Fulfillment of Undergraduate Social Science Students: Pilot Study about Carrier Support

Mariko KOKUGAN, Michiko MATSUSHITA & Toshimi NODA

1. 問題

1. 変換期を迎える学生支援

昨今のわが国の経済状況は、バブル崩壊後の長期低迷状態を抜け、ようやく明るさを取り戻しつつある。この間、リストラ、大企業の倒産や不祥事、また中高年を中心とした人員整理が相次ぎ、終身雇用制や年功序列制のもとで安定していた企業社会やそこに働く大人たちの威信が大きく損なわれた。現在大学に在籍する学部学生の多くは1985年前後の出生であり、好況の幼少期と現在まで続く長い経済不況のもとで成長してきた。彼らは企業の倒産や組織の再編成によって、活力を失った先行世代を見るにつけ、勉強に励み、よい学校に進学し、よい就職口を得ても、外的な要因で人生が大きく左右される現実を知り、先行世代の生き方には懐疑的になっている。また、若者たちは「自分がやりたいこと」「いろいろ体験してみたい」をキーワードに、「頑張らない」「今を大切に生きる」「自分らしく」「好きを仕事に」といった志向を強めていると指摘されている。(小杉、2000)

文部科学省による学校基本調査によれば、2005年3月現在の大学・短期大学進学率(過年度高卒者等を含む)は51.5%と過去最高の値を示し、大学進学率(過年度高卒者等を含む)のみをみても44.2%と過去最高となるなど、大学教育そのもののユニバーサル化が進行している。かつては大学を卒業すれば、労働者としての高い潜在能力を有する者として処遇され、高校や短大、専門学校卒業者よりも高い所得を保証されたが、今日では大学を卒業しても、その先に明るい、安定した将来設計を描くことはできない。

こうした背景のもと、これまで学生自身の主体的な自助努力に負うところが多かった大学の学生支援や就職支援の在り方にも変換が迫られている。すなわち、学校から社会への移行を中心に問題が顕在化している現状から、「大学は従前にも増して、(中略)社会的環境の変化と、学生の質的变化、多様化に柔軟に対処し、個々の学生を自立した一個の社会人に育成し、社会へ送り出す使命が課されている」(私立大学連盟、2004)といえる。

筆者：國眼眞理子(東北公益文科大学教授)

受理：平成17年10月12日

松下美知子(金沢大学留学生センター教授)

苗田 敏美(金沢大学非常勤講師)

2. 価値観の多様化と情報化の進展の中でのキャリア選択

経済的に豊かな社会の到来は価値観の多様化をもたらした。さらに、今日のように社会の変化が激しくライフコースが多様になると、生き方のモデルとなる大人との出会いは難しく、それが若者の将来を一層見通しがきかないものになっている。そして、一段と拍車をかけているのが昨今の情報化の進展である。

本来、青年期とはさまざまな役割実験をしながら自分の生き方を模索する時期であった。しかし、現在では試行錯誤や失敗を極力避け、しかも自己の欲求を抑えて高校へ、また大学へと、とりあえず進学を目指す。大学入学と同時に、目の前に広がるさまざまな可能性にとまどうとともにこれまで棚上げにしてきた「やりたいこと」に着手する。ところが、今度は「やりたいこと」が見えず、「自分がやりたいことは本当にこれなのか」「自分がやることに値するのか」「この選択で誤っていないか」等々の疑問がわき起こる。学ぶことの意味や内容をはじめ「どんな仕事をしたいか」を十分に考える時間を持たないまま過ごしてきた学生は、それらの課題との取り組み方がわからず、模索や混迷を深めていく。多くの選択肢が存在する現代社会の中にあっては、かつて自明のことであった「生きる・学ぶ・働く」意味を定義することは難しく、しかも正解は一つではない。答えに行き着けないこうした曖昧な状態は若者にとってかなり苦しい。

職業選択の自由といわれるものの、だれもが自由に希望する職業に就けるわけではなく、個々の学生なりの制約条件を抱えつつ、限られた期間内の決定を迫られる。大学合格後、入学を一年間延期して就労やボランティア活動を体験するイギリスの「ギャップ・イヤー」という制度や、一年間働くことを義務づけられている5年生大学があるアメリカに比べ、わが国では学生が働くということに対する意識を育てる機会は乏しく、これからの課題といえる。

3. 就職支援からキャリア支援へ

近年フリーターやニートの増加など若者の職業社会への移行の在り方が問題となり、2004年1月の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議による報告書―児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために―」（文部科学省）を契機に、発達段階に応じた生き方教育としてのキャリア教育の重要性が議論されるようになってきた。キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てていく教育」と定義し、社会への足がかりとなるよう教育全体を見直すための具体的なプログラム作りや実践が始まっている。

問題の発端となったフリーターやニート問題は主に高校卒業者や高校中退者の問題だとされるが、大学卒業後進学も就職もしない大卒無業者の割合は増加が著しく、1990年にはわずか2万人であったものが2004年には11万人で、実に20.0%に達し（文部科学省「学校基本調査」2004）、2005年の速報値でも17.8%（前年比-2.2%）を占めるに至っている。これは高卒無業者の7.5%よりも高い値であり、多くの大学にとって看過できない状況にある。

一般開催された日本私立大学連盟拡大就職委員会（2005）の討議でも、大学の偏差値レベルの高低を問わず、無業のまま卒業する学生の多い現状が報告され、単なる就職支援を越えたキャリア支援の必要性和取り組みをはじめた大学の事例が数多く報告された。多くの私立大学ではこれまで就職部を中心に3、4年生を対象に就職支援を行ってきたが、「キャリアセンター」と名称を変更し、低学年次生からの課外活動を含めた自立支援や大学教育の根幹である正課教育を通じたキャリア教育を導入しはじめている。社会や大学が求めるキャリア形成と学生のキャリア形

成に対する意識にはギャップがあり、それをどのように解消し、彼らのキャリア意識を醸成していくかが課題となっている。

4. 大学におけるキャリア支援

キャリア支援とは、良識ある市民を育成し、大学卒業後40年以上も関わることになる職業と、自分の人生との折り合いをどのようにつけるかを考えさせる生き方支援である。終身雇用制や年功序列制の崩壊とともに組織に庇護されるのではなく、自分を見つめ、個としてのキャリアを自ら形成していく必要があり、その基盤形成に大学教育が寄与するところは大きい。

すなわち大学におけるキャリア支援とは、単に実務的に就職のノウハウを教えたり、インターンシップの導入・単位化や資格取得講座を設け学生に勧めることではない。従来型の集団を相手にした支援ではなく、個々の学生の学びの意味や価値観の形成、人と関わる力や自己の意思決定する力を育むことである。キャリア教育ないしキャリア支援というと、ともすれば直接的な「働くこととは」「職業とは」といったテーマが取り上げられがちである。しかし、もっと基本的な学生の生活基盤である大学生活に対して前向きな意識や満足感を持つことができるかが肝要であり、それがキャリア支援の根本でもあると考えられる。事実「進路意識」「大学教員とのコミュニケーション」「大学満足度」の三つが強い相関関係にあるという指摘もなされている(松高、2004)。

II. 研究の目的

これらの問題意識に基づき、本研究は学生へ向けたキャリア支援の基礎資料とすべく、学生生活と彼らの仕事観に焦点をあて、その実態を把握する。具体的には、大学生の諸活動への参加状況と大学入学後の学業への満足度や大学生活の充実度との関係、およびそれらと職業に関する事項との関連を検討することを目的とする。

III. 方法

1. 調査期間 2004年9月
2. 調査対象 金沢大学文系学部において教職課程を履修する学部学生115名(男性55名、女性56名、無回答4名)うち2年76名、3年30名、その他9名)

3. 調査内容

研究目的にしたがい、全国学生生活協同組合連合会による「学生の消費生活に関する実態調査」や私立大学連盟による「学生生活実態調査」第7回・第8回(溝上、2004)を参考に調査項目を作成するとともに、仕事イメージに関しては先行研究(依田、1972)を参考にし、講義の中で「仕事」という言葉から連想されるものを自由記述で求め、3人以上から挙げられたものを項目として採用した。調査内容は以下に示すとおりであり、オリジナルな質問紙を配布し、回答を求めた。

- ①大学生活に関する質問：学内外での諸活動への参加と関与度、大学生活での重点、日常気に掛かっていること、大学入学後の学業への満足度と学生生活の充実度
- ②キャリアに関する質問：アルバイト経験とその意義、インターンシップの理解と関心度、職業イメージ
- ③時間的展望：過去・現在・未来の自分

IV. 調査結果と考察

1. 学生生活に関して

(1) 大学入学後の学業に対する満足感や大学生活への充実感

大学入学後の自分の学業についての満足度を表したのが図1である。過半数の学生が「不満」(7.0%)「やや不満」(47.0%)と回答している。

一方で学生生活に関してはおおむね充実していると感じており、「かなり充実」(15.7%)「まあ充実」(53.9%)を合わせると7割強にのぼる(図2)。

この両者すなわち「大学入学後の学業に関する満足度」と「大学生生活の充実度」の関連を見たのが図3である。学業に対する満足度が「大変に満足」「まあ満足」を合わせて満足群、「やや不満」「不満」を合わせて不満群とし、同様に大学生生活が「かなり充実」「まあ充実」を充実群、「やや充実度に欠ける」「全く充実していない」を非充実群としてその関連を検討した。入学後の学業に満足感を抱いている学生は、大学生生活も充実していると認識していることがわかる($\chi^2=8.215$ 、 $.02 < P < .01$)。

(2) 学内サークル・部活動への参加状況

参加しているとする学生が2/3以上を占め、「熱心に活動している」(46.1%)「まあ熱心に活動している」(32.9%)とかなりの学生が部活動やサークル活動に熱心に参加している。参加の有無および関与度に関しては、大学入学後の学業満足度別(以下学業満足度と表記)では差は見られなかった。

ただし、大学生生活に関する充実度別(以下生活充実度)に見ると参加の割合には差は見られなかったが、その関与度には顕著な差が見られ(図4)、充実群の方が部活動やサークル活動に熱心に取り組んでいることがわかる($\chi^2=10.169$ 、 $P < .01$)。部活動やサークル活動の場は学生にとって大切な「居場所」であり、ありのままの自分が表現でき、共通の目標を目指して一緒に成長できる仲間がいる場、こうした安心感を支えに自分の価値に気づき、大学生生活の充実度を大きく左右する場として機能していると推測できる。

(3) 学外活動の有無と参加状況

学外での活動に参加したことがある学生は23.5%であり、うち59.3%が「熱心」「まあ熱心」に取り組んでいる。学業満足度別に見ると不満足群の方が学外での活動経験があった割合がやや多い傾向($\chi^2=3.13$ 、 $.10 < P < .05$)が見られた。生活充実度別では非充実群で学外での活動経験があった割合がやや多かったが統計的に有意な差は見られなかった。

(4) 大学生生活での重点

大学生活において最も大切にしていることを見ると、「豊かな人間関係を築くこと」(34.8%)であり、「将来へ向け知識や技術を身につけること」(28.7%)「勉強も楽しみもほどほどに経験する」(17.4%)「教養を高める」(13.9%)が選択されている(図5)。

選択肢の表現は多少異なるが、全国大学生活協同組合連合会の経年的な調査によれば、「豊かな人間関係」「勉強や楽しみをほどほどに」「勉強第一」「趣味第一」「クラブ・サークル第一」の選択肢の中で、1992年以前は「豊かな人間関係」が最も多く選択されていた。しかし、1997年からは「豊かな人間関係」「勉強や楽しみをほどほどに」「勉強第一」が同率となり、2000年からは「勉強第一」の割合が増え、2002年ではさらに「勉強第一」派が増加している。これは「就職氷河期」といわれたここ数年の大学生の就職率の低下に対する危機感の表れではないかと考えられている。しかし、金沢大学では伝統のある大学という安心感とともに、大学が位置する

北陸地域は失業率が全国レベルに比して低く、中でも若年層の失業率が低いこと（奥井、2004）が、全国調査とは異なる結果をもたらしているとも考えられる。

(5) 日常気に掛かっていること

日常気に掛かっていることについて全般的な傾向を見たのが図6である（複数回答）。多くの学生が「就職や進学などの進路」（76.5%）が最も気に掛かると回答しており、「対人関係」（25.2%）「自分の能力」（20.9%）「授業やレポートなどの学業」（20.0%）が続く。進路問題が群を抜いて多く選択されている。

溝上が「ユニバーシティ・ブルー」と表現したように（溝上、2004）、大学では好きなことを思い切りやろう、やりたいことをしたいと張り切って入学したのが、「やりたいこと」がいまひとつはつきりと見えず、それでいて日々やらなければならないことはたくさんある。うかうかしているとおっという間に4年間が終わってしまいそうなのだが、大学卒業後の「将来の目標」が不明確なままという焦燥感がこうした結果になって現れているのであろう。

これを学業満足度との関連で見たのが表1である。進路を巡る問題の選択率については満足度による違いはないが、満足群では「専攻」が、不満足群では「自分の性格」「自分の能力」といった項目が多く選択されている。満足群と不満足群間で差があった選択を挙げてみると、満足群>不満足群では「専攻」、満足群<不満足群では「自分の性格」「自分の能力」となるが、不満足群で選択された項目はいずれも変わりにくいものであり、将来に対する閉塞感を窺わせる。

また大学生活充実度との関連で見たのが表2である。充実群は「進路」「専攻」など将来に関わる事柄を気に掛けているのに対して、非充実群は「自分の能力」や「授業やレポートなどの学業」「対人関係」といった現在に関わる事柄が気に掛かる問題として取り上げられている。

2. キャリア形成に関して

(1) アルバイト経験の有無とその意義

アルバイトの経験率は93.9%と極めて高い。その経験は将来のキャリアを考える上で有効かという質問に対しては、「有効とはいえない」が33.3%、「有効」が63.9%であった。アルバイト経験の有無や将来のキャリアを考えるにあたっての有効性に関しては、満足度・充実度別のいずれにおいても高低両群間に差は見られない。また、有効であると考えた学生が多かったが、どのような点を「有効」もしくは「有効ではない」と感じているかについては、今後個別的な調査が必要である。

(2) インターンシップの理解と関心度

「インターンシップ」という用語についての認知度は89.6%と高いが、それへの関心度は「とても関心」が18.9%、「やや関心」が44.1%、「あまり関心なし」は29.7%、「全く関心なし」が4.5%である（図7）。

これを満足度・充実度別に検討したところ、認知度については高低両群間に差は見られなかったが、関心度については学業満足度によってやや差が見られた（図8、 $\chi^2=7.642$ 、 $.10(P<.05)$ ）。すなわち学業満足度が低い群の方がインターンシップに対する関心は高い傾向が見られた。その理由として、学業満足度が低い群の方が将来のキャリアへの不安が強く、それを打開するひとつの方策としてインターンシップ体験に関心を寄せていると考えることができる。

なお今回の調査対象は教職課程履修者であり、将来のキャリアの選択肢として教職を考えているが、昨今の少子化に起因する教員募集数の減少を考えると、結果的には民間企業や公的機関へ

の進路を選択する学生が多いと予想されること、しかも今回の対象者の所属学部が文系学部であることを考慮すると、自らの生き方や将来のキャリアについての探索の場としてこの制度の一層の活用が望まれる。

(3) 保護者が望むキャリアと学生自身の進路希望

保護者が望むキャリアと学生本人が望むキャリアの相違に関しては、66.1%の学生は相違がないと回答している。これを学業満足度別および生活充実度別に検討したところ、学業満足度別で高低両群間に明確な差が見られた(図9、 $\chi^2=14.464$ 、 $P<0.001$)。すなわち学業満足度が高い群では生活充実度も高く、しかも保護者のキャリア期待とも齟齬がないと認識しているが、学業不満足群は生活充実度が低く、保護者のキャリア期待との間にもずれがあると認知しており、自分が納得するキャリア実現にあたって困難が予想される。

3. 「仕事」に関するイメージ

金沢大生は「仕事」という言葉に対して、「誇らしい」「活動的な」「まとまりのある」「生き甲斐のある」「安定した」「明るい」「望みのある」「成長していく」といった肯定的なイメージを抱く一方で、「冷たい」「拘束の多い」という否定的なイメージ、さらに「激しい」「そうぞうしい」といった社会の変動の激しさを反映した動的なイメージを抱いている(図10)。キャリアの世界は学生にとって、アルバイトを除くと全くと言っていいほど未知の領域であり、「冷たい」「拘束の多い」というイメージからはキャリアの世界への近寄りがたさを感じていることが窺える。職業人イメージは保護者や教員を通して得るもの以外はマスコミを通じて入手するものがほとんどであり、働く大人との直接的な出会い、とりわけ信念を持って働く大人たちとの出会いは決して多くない。今回はインターンシップ経験者が極めて少なかったため分析・検討するには至らなかったが、インターンシップという実務に近い経験をすることや、そこで出会った職業人の仕事への取り組みが彼らの仕事に対するイメージに多大な影響を与えられらる。

また、今回は調査対象者から得た仕事のイメージに関するデータについて因子分析(プロマックス回転)を行ったところ、表3のような「成長期待」「躍動感」「厳しさ」の3因子を抽出することができた。この因子分析の結果をもとに、学業満足度別・生活充実度別検討を今後深める予定である。

4. 時間的展望(過去・現在・未来)に関して

(1) 「大学入学後の学業に対する満足度」と時間的展望

3年前の自分・現在・10年後の自分と「大学入学後の学業に対する満足度」との関係で見たのが図11である。満足群では過去よりも現在の自分への評価が高く、10年後もそれが維持されるだろうと認識している。一方、不満足群では3年前の自分に比して現在の自分への評価は低いが、10年後にはまたよくなるだろうと楽観的な展望を持っている。昨今の学生は先行世代が描く大学生イメージとは異なり、欠席も私語も少なく、総じてまじめな学生生活を送っている。大学入学後の学業に対して不満足だと認知する学生が何をもって不満足と評価したのかを検討することが今後の課題である。

(2) 「大学生活の充実度」と時間的展望

同様に3年前の自分・現在・10年後の自分を「大学生活の充実度」との関係で見たのが図12である。この結果より、3年前の自己評価は充実群も非充実群も同レベルであるが、現在の充実

度に関する認知が10年後の自分の予測に影響していることがわかる。すなわち、充実群では過去・現在・未来にわたって一貫して自己評価が高いのに比べ、非充実群では大学入学後の過ごし方が現在の自己評価を低下させ、さらにはそれが将来の予測にまで影響していることがわかる。

V. 結語

今回の調査によって大学入学後の学業に対する満足度が大学生活の充実度と大いに関連していること、また大学生活の充実度が将来への展望やキャリアイメージに関与していることが浮かび上がってきた。先の全国大学生生活協同組合連合会による経年的な調査からも明らかのように、大学生活の重点を勉学におく学生が増加している。文系学部の学生といえば勉学よりも余暇を楽しむといったイメージで語られがちであるが、その実態について今後面接調査によって具体的な行動や意識の面を明らかにし、それをもとに理系学生以上に多様な進路をたどる文系学生への具体的な支援につながるプログラム作りを行うことを今後の課題としたい。

キャリア形成支援は大学側が各種提供しても、それが学生のニーズや意識と合致していなければ成果は上がらない。基本的には学業への満足度を高める内容および講義形式の工夫をしながら正課教育の充実を図るとともに、キャリアを見据えた教育を展開していくことが求められる。キャリア支援とは就職のための支援ではなく、まだ十分ではないながらもやがて社会への足がかりを得ることができる、成長しつつある自分を実感できる自分作りの支援でもある。その意味から学生のキャリア支援ニーズを把握した上で、プログラム策定に学生の主体的な参加を促す工夫が欠かせないであろう。国際基督教大ではキャリア形成支援を大学が単独で企画し実施するのではなく、大学と学生が共同で「学生サービス部」として運営する方向性を打ち出している。学生のニーズを取り込み、より広い視野で支援プログラムを展開できるという点で学ぶべき点が多く(社団法人日本私立大学連盟 2005)、学生自身が主体的に関わることによって一層キャリア意識の開発が図られると考えられる。

ここ数年多くの大学においてキャリア支援科目やキャリア講座の設置が進み、キャリア教育は一層の拡大を見せているが、教育と支援の効果については未だ検討途上にある(浦上、2005)。教育や支援の効果を図るための実態把握とそれに基づく支援プログラムの作成およびその有効性を検討することが焦眉の急である。

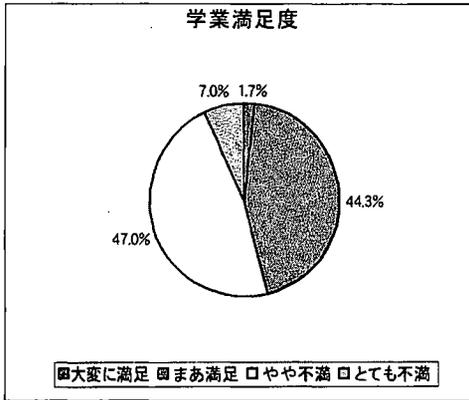


図 1

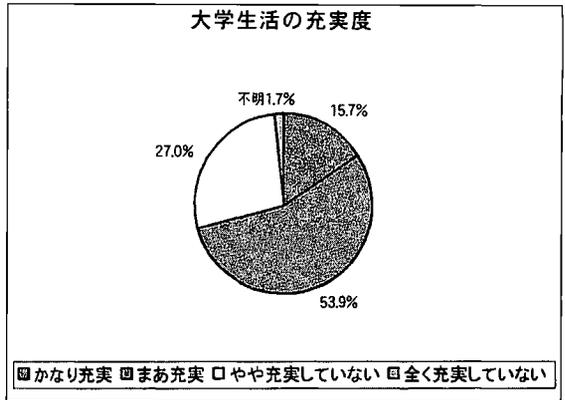


図 2

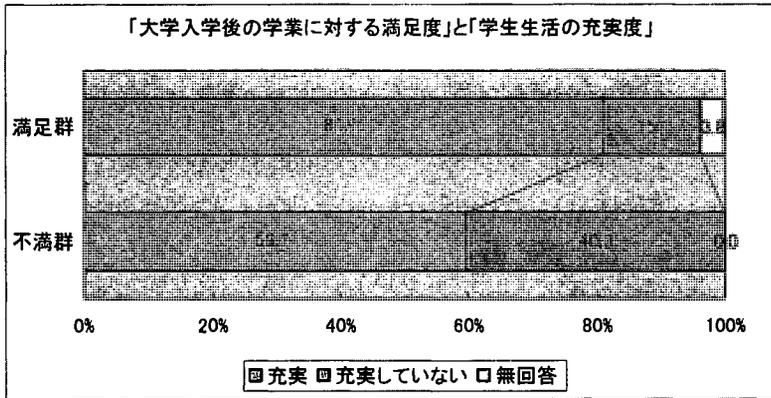


図 3

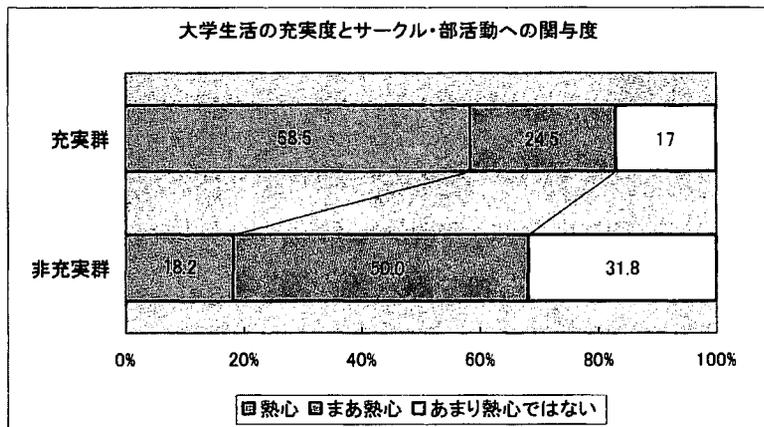


図 4

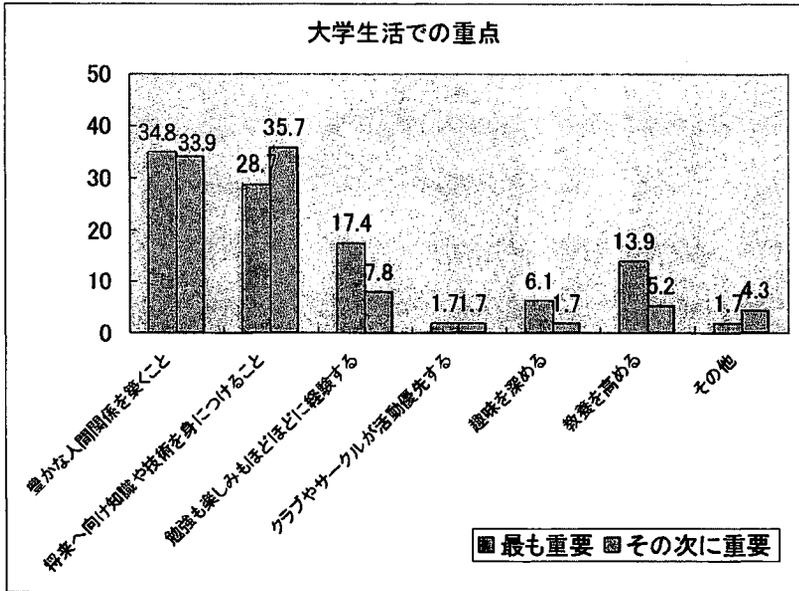


図 5

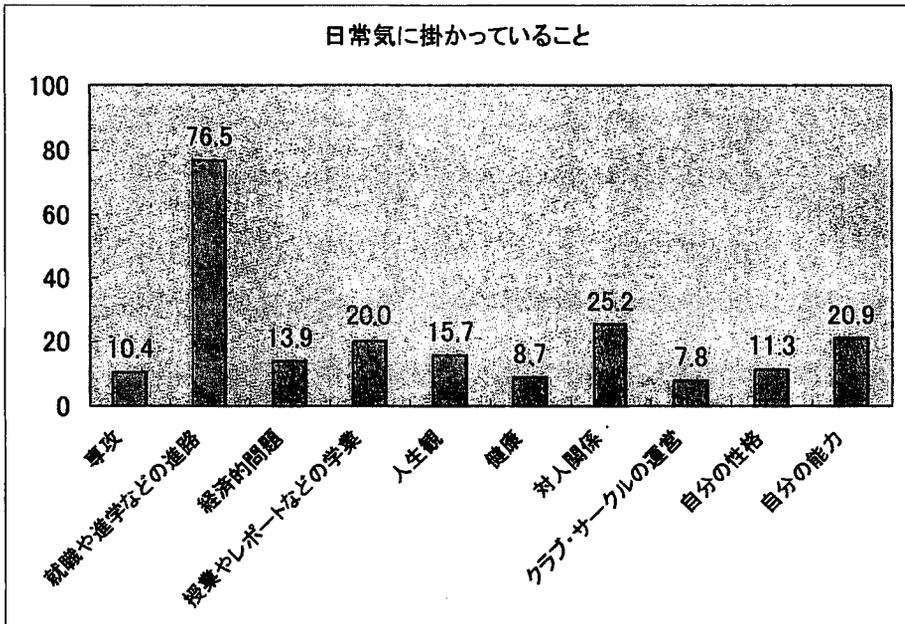


図 6

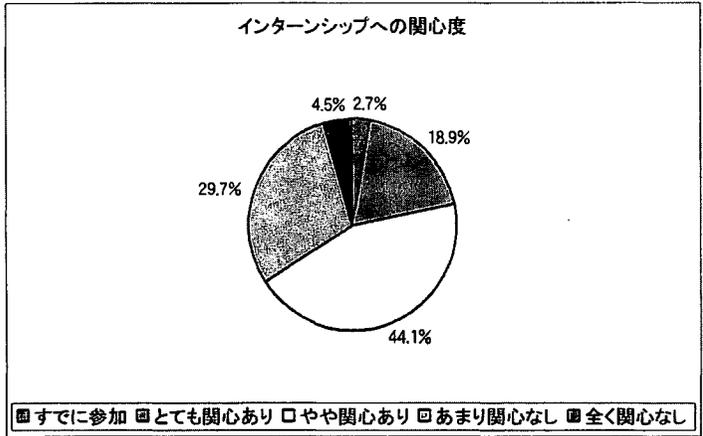


図 7

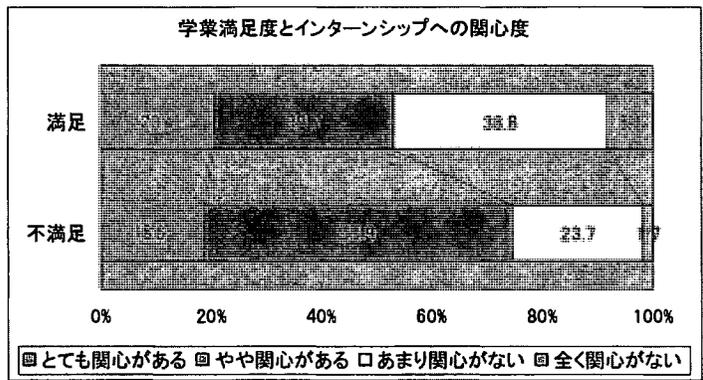


図 8

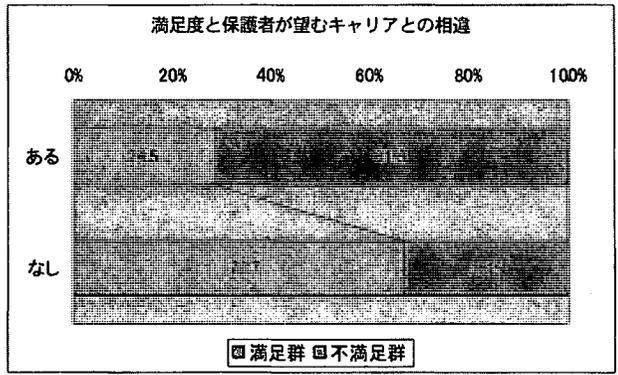
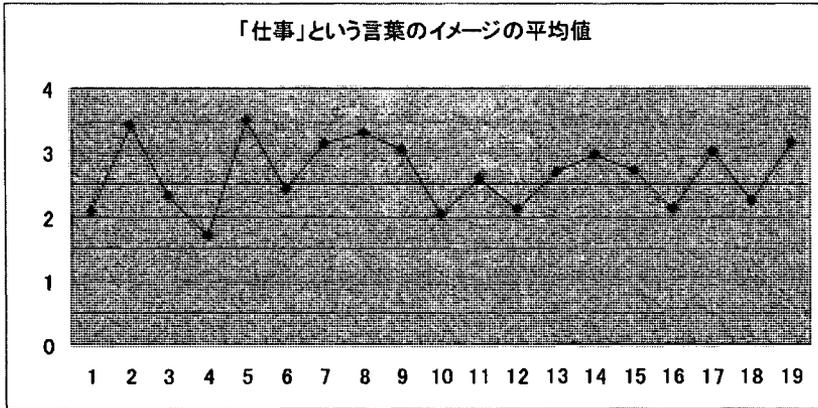


図 9



- | | | | | | |
|-----------|---|--------|-----------|---|--------|
| 4 | 1 | | | | |
| 1：あたたかい | — | 冷たい | 10：おだやかな | — | 激しい |
| 2：拘束の多い | — | 自由な | 11：健康な | — | 病的な |
| 3：バラ色 | — | 灰色 | 12：静かな | — | そうぞうしい |
| 4：なさけない | — | 誇らしい | 13：悲観的な | — | 楽観的な |
| 5：活動的な | — | 不活発な | 14：明るい | — | 暗い |
| 6：なじめない | — | 親しみのある | 15：苦しい | — | 楽しい |
| 7：まとまりのある | — | ばらばらな | 16：後ろ向き | — | 前向き |
| 8：生き甲斐のある | — | むなし | 17：望みのある | — | 望みのない |
| 9：安定した | — | 不安定な | 18：不満足な | — | 満ち足りた |
| | | | 19：成長していく | — | 挫折しそうな |

図 10

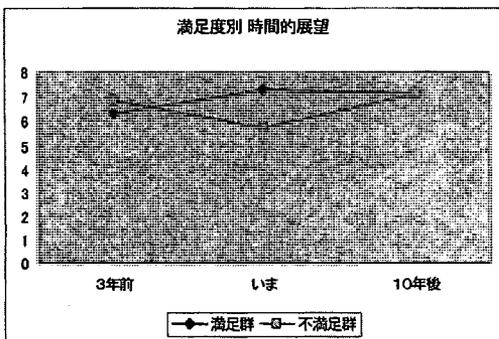


図 11

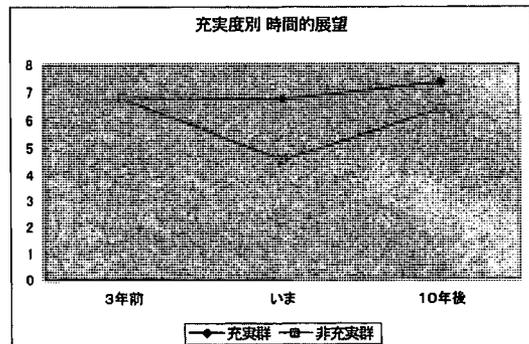


図 12

表1 : 学業満足度と日常気に掛かること

| | 満足群 | 不満足群 | 合計 |
|--------------|------|------|------|
| 専攻 | 17.0 | 4.8 | 10.4 |
| 就職や進学などの進路 | 77.4 | 75.8 | 76.5 |
| 経済的な問題 | 17.0 | 11.3 | 13.9 |
| 授業やレポートなどの学業 | 18.9 | 21.0 | 20.0 |
| 人生観 | 15.1 | 16.1 | 15.7 |
| 健康 | 11.3 | 6.5 | 8.7 |
| 対人関係 | 28.3 | 22.6 | 25.2 |
| クラブ・サークルの運営 | 7.5 | 8.1 | 7.8 |
| 自分の性格 | 5.7 | 16.1 | 11.3 |
| 自分の能力 | 17.0 | 24.2 | 20.9 |

表2 : 学生生活充実度と日常気に掛かること

| | 充実群 | 非充実群 | 合計 |
|--------------|------|------|------|
| 専攻 | 13.8 | 3.0 | 10.4 |
| 就職や進学などの進路 | 80.0 | 66.7 | 74.8 |
| 経済的な問題 | 13.8 | 12.1 | 13.0 |
| 授業やレポートなどの学業 | 17.5 | 24.2 | 19.1 |
| 人生観 | 13.8 | 15.2 | 13.9 |
| 健康 | 8.8 | 6.1 | 7.8 |
| 対人関係 | 23.8 | 30.3 | 25.2 |
| クラブ・サークルの運営 | 8.8 | 6.1 | 7.8 |
| 自分の性格 | 10.0 | 15.2 | 11.3 |
| 自分の能力 | 17.5 | 27.3 | 20.0 |

表3-1: 仕事イメージ1

因子分析: 因子負荷量<回転後(プロマックス法)>

| 項目 | 因子No. 1 | 因子No. 2 | 因子No. 3 |
|------------|---------|---------|---------|
| 1. あたたかい | 0.240 | -0.091 | -0.304 |
| 2. 拘束の多い | -0.046 | 0.055 | 0.373 |
| 3. バラ色 | 0.093 | 0.383 | -0.334 |
| 4. なさけない | -0.235 | -0.556 | 0.208 |
| 5. 活動的な | 0.043 | 0.548 | 0.050 |
| 6. なじめない | -0.543 | -0.063 | 0.067 |
| 7. まとまりのある | 0.259 | 0.158 | 0.524 |
| 8. 生き甲斐のある | 0.271 | 0.434 | -0.123 |
| 9. 安定した | 0.589 | -0.173 | 0.191 |
| 10. おだやかな | 0.398 | -0.822 | -0.031 |
| 11. 健康な | 0.597 | -0.170 | 0.026 |
| 12. 静かな | 0.108 | -0.609 | -0.253 |
| 13. 悲観的な | -0.621 | 0.210 | 0.118 |
| 14. 明るい | -0.069 | 0.101 | -0.332 |
| 15. 苦しい | -0.340 | 0.050 | 0.394 |
| 16. 後ろ向き | -0.606 | -0.270 | -0.014 |
| 17. 望みのある | 0.581 | 0.340 | 0.028 |
| 18. 不満足な | -0.417 | -0.325 | 0.089 |
| 19. 成長していく | 0.729 | 0.125 | 0.137 |
| 因子寄与 | 3.3521 | 2.4570 | 1.0936 |
| 寄与率(%) | 17.6429 | 12.9315 | 5.7559 |
| 累積寄与率(%) | 17.6429 | 30.5744 | 36.3303 |

表3-2:仕事イメージ2

| 項目 | 因子名 | 因子No. 1 生き甲斐感 | 因子No. 2 躍動感 | 因子No. 3 厳しさ |
|------------|-----|------------------|----------------|----------------|
| 13. 悲観的な | | -0.621 | | |
| 16. 後ろ向き | | -0.606 | | |
| 6. なじめない | | -0.543 | | |
| 18. 不満足な | | -0.417 | -0.325 | |
| 15. 苦しい | | -0.340 | | 0.394 |
| 10. おだやかな | | 0.398 | -0.822 | |
| 17. 望みのある | | 0.581 | 0.340 | |
| 9. 安定した | | 0.589 | | |
| 11. 健康な | | 0.597 | | |
| 19. 成長していく | | 0.729 | | |
| 12. 静かな | | | -0.609 | |
| 4. なさけない | | | -0.556 | |
| 3. バラ色 | | | 0.383 | -0.334 |
| 8. 生き甲斐のある | | | 0.434 | |
| 5. 活動的な | | | 0.548 | |
| 14. 明るい | | | | -0.332 |
| 1. あたたかい | | | | -0.304 |
| 2. 拘束の多い | | | | 0.373 |
| 7. まとまりのある | | | | 0.524 |

参考文献

1. 社団法人日本私立大学連盟就職委員会 2004「転換期を迎えた学生支援—就職支援から見てきた課題—」
2. 社団法人日本私立大学連盟就職委員会 2004「キャリア支援に向けて—学生の豊かな人生のために—」
3. 社団法人日本私立大学連盟 2005「いま求められる学生支援—学生委員会・就職委員会連携を考える小委員会報告—」
4. 中村一郎 2005「パネル・ディスカッション キャリアセンター化後の展望と課題」(平成17年度拡大学生就職支援協議会「キャリアセンター化の直面する課題—重要な大学固有の教育カーレジュメ・資料集」より) 社団法人日本私立大学連盟就職委員会
5. 大久保幸夫編 2002「新卒無業」東洋経済新報社
6. 溝上慎一 2004「現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる—」日本放送出版協会
7. 奥井めぐみ 2004「地方大学の教育と就職」Business labor Trend 7月号 独立行政法人労働政策研究・研修機構
8. 松高政 2004「キャリア教育再考—進路意識を高めるカギは教員との交流による満足度—」Between No. 207 進研アド
9. 文部科学省 2004「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」
10. 小杉礼子 2002「フリーター 自由の代償」日本労働研究機構
11. 浦上昌則 2004「キャリア関係研究の動向」教育心理学年報第44集 日本教育心理学会
12. 白井利明 2003「大人へのなりかた」新日本出版社

大学生の進路選択に関する調査

調査のお願い：

この調査は学校社会から職業社会への移行期に見られる問題を探索するために
行われるものです。無記名で、すべて統計的に処理しますので、みなさんの結果が
ほかのひとに知られることは決してありません。ありのまま自由に書いてください。

1. あなたの大学生生活についてお尋ねします。

- ①現在学内でサークル・部活動等に参加していますか・・・（参加・参加していない）
- ②その活動時間は週時間くらいでしょう・・・（時間/週）
- ③その活動への関与度は（熱心に参加している・まあ熱心・あまり熱心ではない）
- ④学外での活動経験はありますか。例えばボランティア活動など。（ある・ない）
- ⑤その活動への関与度は（熱心に参加している・まあ熱心・あまり熱心ではない）
- ⑥大学生活での重点は何でしょうか。最も重要なものに◎、その次に重要なものに○
- （ ）豊かな人間関係を築くこと （ ）将来へ向け知識や技術を身につけること
- （ ）勉強も楽しみもほどほどに経験する （ ）クラブやサークルが活動優先する
- （ ）趣味を深める （ ）教養を高める
- （ ）その他（具体的に）
- ⑦日常気に掛かっていることは何でしょうか。
- （ ）専攻、（ ）就職や進学などの進路、（ ）経済的な問題
- （ ）授業やレポートなどの学業 （ ）人生観、（ ）健康
- （ ）対人関係（友人関係、家族との関係、異性との関係、先輩、教員、ほか）
- （ ）クラブ・サークルの運営、（ ）自分の性格、（ ）自分の能力
- ⑧大学入学後の自分の学業への満足度は（大変に満足・まあ満足・やや不満・不満）
- ⑨学生生活の充実度を評価すると（かなり充実・まあ充実・やや充実度に欠ける・全く充実していない）
- ⑩アルバイト経験はありますか・・・（ある・ない）
- ある→そのアルバイト経験はあなたにとってどのような意味があるでしょうか
- （ ）
- アルバイト経験は将来のキャリアを考える上で有効でしたか
- （ ）
- （ ）なので有効・有効とはいえない

2. キャリア選択についてお尋ねします。

- ①「インターンシップ」ということばを知っていますか・・・（知っている・知らない）
- ②インターンシップに参加してみたいと思いますか
- （とても関心がある・やや関心がある・あまり関心がない・まったく関心がない・すでに参加した）
- ③あなたがキャリアを選択する上で優先したいことを3つ挙げるとすると
- （ ）（ ）（ ）
- ④これまでのあなたの進路選択にもっとも影響をあたえた人は（ ）

- ⑤ これまでに自分を鍛えてくれた一皮むけるような体験の有無・・・ (ある・ない)
ある場合には具体的に ()
- ⑥ 進路についてあなたが相談するのは・・・ ()
- ⑦ 保護者が望むキャリアとあなたが望むキャリアに、相違はあるか・・・ (有 ・ 無)
あるとしたら、それをどのように乗り越えたいですか
()
- ⑧ あなたが望むキャリア人生は ()
- ⑨ いまのところもっとも実現しそうなキャリア人生は
()

3. あなたは次のことばをどの程度知っていますか。当てはまるものに○をつけてください。

(1. 内容をよく知っている、 2. 聞いたことがある、 3. 知らない)

- ① 男女共同参画社会 (1 ・ 2 ・ 3)
- ② 男女雇用機会均等法 (1 ・ 2 ・ 3)
- ③ 育児休業法 (1 ・ 2 ・ 3)
- ④ 選択的夫婦別姓制度 (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑤ 性別役割分担 (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑥ 介護休業法 (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑦ セクシュアル・ハラスメント (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑧ パワー・ハラスメント (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑨ ジェンダー (1 ・ 2 ・ 3)
- ⑩ ポジティブ・アクション (1 ・ 2 ・ 3)

4. 「仕事」ということばのイメージをお尋ねします。

- | | | |
|-----------|--|--------|
| | 4 3 2 1 | |
| ① あたたかい | ----- ----- ----- ----- | 冷たい |
| ② 拘束の多い | ----- ----- ----- ----- | 自由な |
| ③ バラ色 | ----- ----- ----- ----- | 灰色 |
| ④ なさけない | ----- ----- ----- ----- | 誇らしい |
| ⑤ 活動的な | ----- ----- ----- ----- | 不活発な |
| ⑥ なじめない | ----- ----- ----- ----- | 親しみのある |
| ⑦ まとまりのある | ----- ----- ----- ----- | ばらばらな |

